アメリカの農と食をめぐる潮流を読む

－近年刊行された和書 4 冊を題材に－

二　村　太　郎

- エリザベス・ヘンダーソン，ロビン・ヴァン・エン（山本きよ子訳）『CSA：地域支援型農業の可能性－アメリカ版地産地消の成果』（家の光協会，2007）．（原題：Elizabeth Henderson, with Robyn Van En, *Sharing the Harvest: A Citizen's Guide to Community Supported Agriculture*. Revised and Expanded Edition（White River Junction, VT: Chelsea Green Publishing, 2007）.）
- マイケル・ポーラン（ラッセル秀子訳）『雑食動物のジレンマ：ある 4 つの食事の自然史』（上・下巻）（東洋経済，2009）．（原題：Michael Pollan, *Omnivore's Dilemma: A Natural History of Four Meals*（New York, NY: Penguin Press, 2006）.）
- 斎藤　潔『アメリカ農業を読む』（農林統計出版，2009）．
- 佐藤亮子『地域の味がまちをつくる－米国ファーマーズマーケットの挑戦』（岩波書店，2006）．

現代のアメリカ合衆国（以下「アメリカ」と略）の農業と食について聞かれた時、日本に住む人々が思い浮かべるのは何であろうか。『大草原の小さな家』に代表される家族農場、大型機械を活用した大規模な穀作農業、マクドナルドに代表される安価な牛肉やポテトとファストフードなど、答えは様々であろう。難しいのは、それらのいずれもが現在のアメリカの農と食に関連する側面を持ちつつ、それらだけでは全体像を説明することができないことである。筆者は主にアメリカを研究対象とする地理学者であるが、かつて留学から帰国してすぐに担当した「アメリカ地誌」「アメリカ地理」の講義でアメリカの農と食について論じようとした時、甚だ困ってしまった。というのは、農業生産の地域区分などを軸に地理学の講義を展開しても、必ずしもアメリカの農業や食の諸問題の全貌は見えてこないし、これらについて包括的に書かれた和書は皆無に等しかったからである。他方、受講する学部生を相手に英語のテキストを用いるのは難しかったため、筆者はこのテーマについて、日本語で書かれた諸分野の文献を組み合わせながら講

義を行うように努めてきた。

本稿で紹介するのは、2006年以降に日本で発刊されたアメリカの農業と食に関する書籍4冊である。厳密にいえば、同時期にアメリカの農業と食について書かれた本はこれら以外にも複数出版されているが、内容が比較的平易に書かれており、なおかつ学術的な価値を見いだせるものに限定すると矢ケ崎・斎藤・菅野編（2006）をのぞけばあまり多くない。今回取り上げる書籍はどれも概ね読みやすく、それぞれを読み比べてみる価値があると考えられる。

本稿で紹介する4冊のうち、2冊は英語で出版された書籍の翻訳版で、もう2冊は日本人の著者による単著である。また、著者の所属をみると、2冊は大学に所属する研究者（専門は農業経済学とジャーナリズム）が書いたものであり、もう2冊はそれぞれフリーのジャーナリストと農業者によるものである。いうまでもなく、今回とりあげる4冊を読むだけで広大なアメリカの諸相についての全てを理解できるとは言い難いが、本稿ではアメリカの農と食を検討するきっかけとして、異なる内容の文献からこのテーマについて多角的かつ包括的に理解するアプローチを試みたい。ただし、本稿では各々の書籍の全容を詳細に紹介するのではなく、重要と思われる点に絞って説明する。なお、本稿の執筆にあたっては、農村社会学者のデュプイーが「映画を通して食を教える」ことを意図して記した、映画紹介の小論（DuPuis 2005）を参考にした。

まず、販売部数が示すようにもっとも影響力があった1冊から始めよう。マイケル・ポーラン著『雑食動物のジレンマ』は、出版された当時、アメリカ国内で一大ベストセラーとなった著書の翻訳版である。それまでにもたびたびニューヨークタイムズマガジンなど商業誌に寄稿していたポーランは、アメリカの農業や食に関わる問題について、積極的に発言してきた。カリフォルニア大学バークレー校でジャーナリズムを講じる彼は、ニューヨーク大学の栄養学・公衆衛生学教授であるマリオン・ネッスルとともに、現在この分野においておそらくアメリカ国内でもっとも広く知られた著者である。実際、筆者が大学院留学中、何名かの知人は学部の担当科目内で本書を中心的な課題文献として採り上げていた。

ポーランは本書の冒頭で、現代世界では人間の食物供給が量・質ともに増大した一方、栄養や健康に関する情報の氾濫の影響によって、現在のアメリカの人々が広い意味での摂食障害に陥っていると指摘する。そのうえで、彼は「何を食べようか？」という単純な問いに対して「私たちを支える食物連鎖を大地から食卓まで追跡する」（p. 13）ことをめざす。すなわち、人々が食べるものはどこでどのように作られて食卓まで来ているのかを明らかにするために、彼は人々の日常の食を成り立たせる食物連鎖体系をおおまかに工業、オーガニック、狩猟採集の

３つに分類し、それぞれの構成を詳細に検討していく。彼はさらに、それぞれの食物連鎖体系が生み出す食品の質的な違いを明らかにするために、４つの食事（トウモロコシとファストフード、企業型有機農産物、地産地消型有機農産物、そして野生動物の肉とキノコ）に焦点を当てて、それらの栽培・生産のはじまりから加工・販売までの流れを追跡していく。彼はトウモロコシを栽培したり、鶏を捌いたり、キノコを採集したりと、全ての過程において主体的に関わるだけでなく、さらにそれらを自ら料理しており、彼が自ら積み重ねた体験をとおして本書の執筆に取り組んだことがうかがわれる。

アメリカの農と食について検討する上で、本書はどの食物連鎖体系についても学ぶことが多い。その中でもっとも参考になるのは、おそらく第一部のトウモロコシに関する記述であろう。アメリカはトウモロコシの生産量と輸出量で圧倒的な世界シェアを誇るが、これらのうち直接我々の食卓へ向かうものは皆無に近く、そのほとんどが加工用もしくは家畜の飼料に利用される。トウモロコシの加工でもっとも重要なのがコーンシロップの製造で、これは揚げた菓子から炭酸飲料まで、現在我々が口にするもののほとんどに含まれている。著者はトウモロコシを追究していく過程で、なぜアメリカの農業で供給過剰なトウモロコシが生産量を減らすことなく、しかも莫大な補助金投下のもとで穀作が継続されているか、その背景を指摘している。関心のある読者には、本書の内容を踏まえてトウモロコシ生産の実際を鋭く映し出したアーロン・ウルフ監督の映画『キング・コーン』（原題：King Corn（2007））を併せて勧めたい。また、前述のとおりトウモロコシはそのかなりの部分が家畜の飼料として利用されており、現代の企業的畜産業において牛を急速に太らせるために大量に消費されているだけでなく、病気にならないための抗生物質も投入されている。ハンバーガーから牛丼まで、我々がなぜ安価で牛肉を含む食品を購入することができるのか。誤解を恐れずにいえば、過剰なまでのトウモロコシの生産が工業的に肉牛の飼育頭数の増加を可能にし、ひいては牛肉が安価で販売されることを可能にしているのである。

工業的農業が有する諸問題を克服する目的で成長していった流れの一つとして有機農業が挙げられるが、本書ではこれを企業的有機農業による農産物とそうでないものに分けて説明している。アメリカではアグリビジネスによる有機農業部門への参入と支配が急速に拡大しており、ポーランはこれを「ビッグ・オーガニック」と表現している。これらは、当初個々の農家がニッチと理想を求めて始めた農業生産の領域から、はるかに離れてしまっているのである（Guthman 2004）。

ポーランはこれらの問題を指摘したうえで、その対極的な例として、ヴァージニア州にあるポリフェイス農場で有機農業を営むジョエル・サラティンの活動を紹介する。サラティンは既に自らの農業活動に基づいた著書を数冊出版しており、

特に独自の養鶏技術に定評があった。彼は固定した鶏舎内で鶏を飼育するのではなく、大きな柵と網がついた自作の移動式鶏舎を用いて鶏を育てる手法を実践している。この方法によって飼育される鶏は、常に動きまわって健康を保つだけでなく、草地や地中にいる虫を食べて糞を落としていくことで、農地の地力回復にもつながっており、文字通り cage-free（鳥かごから放たれた平飼い）の鶏なのである。サラティンはこのような鶏の移動と耕作地の循環を重ねながら、鶏の飼育に穀物と野菜の栽培を組み合わせた農業を実践している。

サラティンはさらに、自分の農作物を「ローカル」に販売することに大きなこだわりを持っている。彼はスーパーマーケットなどの大型小売店への出荷を拒否するだけでなく、遠方からの宅配注文依頼も断って、農場から半径150マイル以内の地域でのみ販売を行う地産地消型の農産物販売戦略を採用している。ポーランはここから、持続的でかつ地域に根差した農業実践の可能性を探っている。

折しも、シュローサー（2001）の原著 *Fast Food Nation* が刊行されたのを機に、アメリカでは今世紀に入って農と食に関連する書籍の出版が急増した。ポーラン、ネッスル、小説家バーバラ・キングソルヴァーなど、研究者からジャーナリストや作家まで、幅広い著述者によってアメリカの農と食をめぐる諸問題に関する本が書かれている。この影響で、アメリカ人の間で自国の農と食のあり方を見直す動きは着実に増加している。そのような中、アメリカ国内でベストセラーとなった本書が日本でも出版されたことは喜ばしい。ただし、翻訳版に関していえば、面積単位のエーカーとヘクタールが混在していたりするなど、和文がややこなれていないのが残念ではある。

なお、本書は巻末に各章ごとの参考文献が列挙されているが、その中で和訳が出版されているものはあまり多くないため、より詳細な内容について知りたい場合は原典に当たる必要がある。また、ポーランの本書は学術的な先行研究の蓄積を十分尊重しておらず（明記されない質的な無断引用が多い）、本書をはじめとした近年の啓蒙的な農と食に関連する諸出版物の多くが読者に食生活の改善を勧める一方で、貧困や肥満など社会的不平等の問題への解決方策を提示することもなく、非政治的な姿勢で問題の根源を直視していないことを指摘する地理学者ガスマンの批評（Guthman 2007）も、併せて挙げておきたい。

アメリカにおける近年の農と食をめぐる変化の一つとして挙げられるのが、ファーマーズマーケット（Farmers' Market）に代表されるように、農業者による農産物の直接販売の機会が著しく増加したことである。佐藤亮子『地域の味がまちをつくる－米国ファーマーズマーケットの挑戦』は、フリーの農業ジャーナリストがメリーランド州の大学院に短期留学した時の現地調査を元に書かれた、アメ

リカのファーマーズマーケットに関する著作である。本書で紹介されているのは、主にメリーランド州内の各地とルイジアナ州ニューオーリーンズのマーケットであるが、その他の地域のマーケットについても随時紹介されている。

本書が興味深いのは、ファーマーズマーケットをただ単に「楽しい買物の場」として無批判に賛美するのではなく、設立から運営方法や課題まで、マーケットを幅広い視点からとらえようとしていることである。例えばファーマーズマーケットでの大きな問題点の一つとして、農産物の価格が割高である（と受け止められがちである）ゆえに低所得者層には買物が難しいという、購買者側が経験する不平等への批判がある。これに対して、連邦農務省（USDA）は、女性や幼い子どものいる低所得の世帯を対象としたWIC（Women, Infants and Childrenの略称）と呼ばれる配給型クーポン制度を州政府農務省と協力して設けており、本書ではこれについても取り上げている。WICを利用することで、低所得でもファーマーズマーケットで新鮮で栄養価の高い青果物を入手できることができる。筆者も自身の調査の折にWICの利用を目にしていたが、これは実際に買物客とのやりとりを観察していないと気づきにくい。WICを利用する人々は、それで多種の野菜を購入する人から好物の果物の購入に充てる人まで、様々であるのが実状である。WICの利用に関しては、ファーマーズマーケットで販売される地域の青果物という条件以外に厳格な規定はされていないが、経済的不平等が大きいアメリカならではのマーケットでの一側面として理解できよう。

ファーマーズマーケットの研究を進めていくと、全国各地に点在するマーケットは規模や立地から形態や販売品まで様々で、各地のファーマーズマーケットを回っても著しく異なるものを見る場合が珍しくないことに気づく。これはつまり、「ファーマーズマーケットの地理」が研究対象として十分成り立つことを示している。本書が強調しているように、ファーマーズマーケットでは地域や時期によって販売される品目に差があることはもちろんながら、加工品や工芸品の販売の可否や、ボランティアの参加の有無まで、その形態は様々である。ただ重要なのは、このようなマーケットを通して育まれる生産者と消費者の直接的なつながりが極めて重視されるということであり、本書はその点について指摘することを忘れていない。

本書の短所は、学術書・一般書の区別を問わず参考文献が非常に少ないことである。日本では「ファーマーズマーケット」という言葉が農産物直売所と混同して使われているため、今後学究を深めていく過程でアメリカのファーマーズマーケットについて体系的に学んでみたいと思う人も出てくるであろう。筆者の管見の限り、本書はアメリカのファーマーズマーケットについて日本語で書かれた最初の書籍であると考えられるが、初学者が本書を通じて参照できる文献資料が一

冊も挙げられていないのが惜しまれる。

他方で、全体を通して文章には躍動感があり、気軽に読み進めることができる。著者が各地を回りながら本書を書きあげていった様子が容易に想像でき、著者自身のフィールド調査に基づいたモノグラフという点で本書は有用である。

ファーマーズマーケットと並んで、ここ十数年で急速に成長している農産物の直接販売形態がCSA（Community-Supported Agricultureの略）である。CSAとは、農業者と消費者のつながりを維持し、農業生産を支えていこうとするために、消費者が農業者へ前金を払う契約購入型農産物直売である。ニューイングランドでCSA設立のため奔走したロビン・ヴァン・エンの遺作を、エリザベス・ヘンダーソンが再構成して出版された『CSA：地域支援型農業の可能性－アメリカ版地産地消の成果』は、先の佐藤（2006）と同様、大山（2003）を除けばアメリカのCSAの活動についておそらく日本語で初めて紹介された一般書である。本書はどちらかというと農産物への関心と意識の高い消費者や農業実践者に向けて書かれたものであるため、初学者にとってはややわかりづらい点もあるだろう。ただし翻訳は分かりやすい文章で書かれており、全体的には読みやすい。

著者によれば、CSAは概念的にASC（Agriculture-Supported Community）と表記することもできるという。この指摘が示すのは、「コミュニティが一方的に支えようとする農業」だけではなく、「農業活動の継続がコミュニティの支えを為していく」という興味深い考え方である。

なぜコミュニティが農業を支え、同時に農業がコミュニティを支えるのだろうか。一見わかりにくいかもしれないが、それはつまるところ農業者と消費者の対等な一体化にある。農業者が生産する農産物を、近隣の地域に生活する消費者が農業者の望む価格で購入することによって、農業者は自らの農業を持続することができ、消費者も継続して旬の野菜や果物を手に入れることができる。このような消費者が増えれば増えるほど、農業生産の拡大も促され、その結果新しい雇用を創出することができる。つまり、CSAが創り出す関係性は農業者と消費者を二項対立させることではなく、農産物を媒介とした相互の活発な取引・交流関係が、結果として双方の活性化をももたらすのである。CSAはアメリカ西海岸とニューイングランド地域で始まり、現在はそれが全国各地の意欲的な農業者と近隣地域の消費者によって行われている。

私事で恐縮だが、実は筆者も1年間CSAに関わったことがある。2006年、大学院留学時代に親しくなった農家と院生仲間で金を出し合って契約を結び、農産物の生育期間中に購入を続けた。事前に定められた定期的な配達は毎週水曜日と土曜日の夕方であったが、新しく配達されてくる箱の中に何が入ってくるか、毎

回ポーチでビールを飲みつつ皆で楽しみに待ったものである。インターネット上でリストから農産物を選択して購入するのとは異なり、自分たちの手元に届く野菜は契約先の農業者がもっとも良い状態を選んだ逸品である。それを期待しての購入であるゆえに、定期的に届く箱には作る側と買う側の「支援」が詰まっているのがCSAの面白さであろう。

ところで、CSAの活動は必ずしもアメリカが起源だったわけではない。本書が指摘するように、日本の生活協同組合による提携活動はその先駆的な存在であったとされている。「提携」Teikei、すなわち生産者と消費者が協力し合って何かを成し遂げていくこと、この言葉はアメリカでCSAに関わる農業者にとって既に定着した言葉である。現在の日本では従来の生活協同組合だけでなく、「らでぃっしゅぼーや」や「大地を守る会」などの組織も生まれており、これらによる農産物の宅配制度が次第に拡充している。しかしCSAの特徴はあくまで生産者と消費者の直接取引にあり、企業等の第三者が中間に入る日本の制度とは大きく異なると言える。積極的にチラシを配り契約数の増加を目指す農産物宅配事業の営業活動をみると、購入者の増加がどこまで我が国の農業生産の活性化につながっているのか、実態はなかなかみえてこない。筆者はアメリカでみることがなかったこれらの事業に驚かされる一方で、この可視性の差が第三者の媒介による宅配制度とCSAの違いとして表れているのではないかと考えている。

これまでに取り上げた3冊と異なり、斎藤　潔『アメリカ農業を読む』は、農業経済学者が現在のアメリカ農業の特徴や諸問題（第一部）と、それを創り出した過去の背景（第二部）を説明する著書である。これまで取り上げた3冊が多少なりとも主観を交えながら書かれていたのに対して、本書は統計データに依拠した記述も多く、特に第一部は客観的に書かれている。タイトルは壮大だが、著者は合衆国の農業のすべてを網羅することを意図していない。むしろ、アメリカ農業の根底を支える穀物生産に議論の中心を据え、第一部ではそれに内在する諸問題（農業生産の集中、補助金の実態、遺伝子組み換え作物など）について論を進めている。本書の第一部の後半は前述したポーランの著書と重複する個所も多く、読み比べるとポーランの著書の方がより詳細に記述されているといえる。

本書で有用なのは、むしろ先行研究を整理しながら論じている第二部であろう。筆者にとって最も興味深かったのは、アメリカの農業後継者に関する指摘である。日本同様、アメリカでも農業者の高齢化が問題となっているが、斎藤によれば、アメリカの農業者は日本と異なり農地の世襲がなく、親世代が子世代に同じ土地を譲渡するケースは少ないという。これはつまり、土地購入へのアクセスなどを考えると長期的には、アメリカの方が血縁に縛られず、農業への新規参入（就農）

がしやすい環境にあることを示している。また、第二部で取り上げられているホームステッド法の成立過程とその問題、農業機械の普及や交通インフラの整備が農業生産にもたらした影響、モリル法とランドグラントカレッジの設立などは、都市化が進展する以前のアメリカ各地の地域変化を理解するためにはいずれも重要な内容であり、アメリカ農業の歴史的な発展経緯を知るうえでも非常に参考になると思われる。ただし、これらの章について紹介される関連文献は、数が豊富であるものの、過度に長く続く引用が随所で見受けられ、論旨をやや読みにくくしているのが残念である。

本書の分析対象は、著者が在外研究で滞在したアイオワ州の農業を主としているが、農業そのものに対する著者の視点に若干の偏りがあるのか、家族農場を中心とした小規模農業への言及が極めて少ない。また、肥満の問題や有機農業に関する章についても、先行研究を十分踏まえた議論とはいえず、結論がやや一面的であるように見受けられる。本稿の流れにそっていえば、ファーマーズマーケットの設立やCSAの普及の増加傾向などはアイオワ州でも事例が多数みられるのにもかかわらず、それらに関する言及は皆無である。これは単に著者の関心と筆者のそれが一致しなかったためともいえるが、見方を変えると、農業経済学などの研究者がみる「アメリカ農業」と消費者やジャーナリストがみる「アメリカ農業」の課題が、質的に異なるものであることの証左かもしれない。

冒頭で述べた通り、「アメリカの農業と食」と一言にいっても、栽培する作物や飼育する動物から生育条件・販売形態・加工方式まで様々で、国土が広大なアメリカにおけるそれらを理解するには幅広い知識が必要である。同時に、本稿で強調したいのは、それらの多くの実態を知るためには、統計資料だけに頼らず人々の生活と関わる側面からの検討が重要であるということである。文献を読み重ねているだけでは現地での変化の実態は見えてこないし、フィールドを歩きまわるだけでは体系的な理解に時間がかかる。ポーラン（2009）を通して読むと、アメリカの農と食についてかなり広範囲な内容を知ることができるが、それらにまつわる歴史的背景を知る上では斎藤（2009）が参考になるし、新たな農と食の運動の一環ともいえるファーマーズマーケットやCSAの普及・拡大について深く理解するには、佐藤（2006）やヘンダーソン＆ヴァン・エン（2007）の実証研究が有用である。幸い、本稿で紹介した文献のどれもが、アメリカの諸地域における著者独自の調査や経験を多少なりとも含むものであり、アメリカの農と食について関心を抱く学徒は、今後もこれらを積極的に活用しながら研究を蓄積していくことが望まれる。なお、筆者は本稿準備中に矢ケ﨑（2010）の発刊を知ることとなったが、その内容と論評については別の拙稿（二村　2010）に譲りたい。

引用文献

E. Melanie DuPuis, “Film Review Essay: Teaching Food with Cinema,” *Rural Sociology* 70, no. 4 (2005): 584–588.

二村太郎「書評：食と農のアメリカ地誌」『地理空間』3, no. 2 (2010): 139–142.

Julie Guthman, *Agrarian Dreams: The Paradox of Organic Farming in California* (Berkeley, CA: University of California Press, 2004).

Julie Guthman, “Commentary on Teaching Food: Why I am Fed Up with Michael Pollan et al,” *Agriculture and Human Values* 24, no. 2 (2007): 261–264.

エリザベス・ヘンダーソン、ロビン・ヴァン・エン（山本きよ子訳）『CSA：地域支援型農業の可能性－アメリカ版地産地消の成果』（家の光協会，2007）.（原題：Elizabeth Henderson, with Robyn Van En, *Sharing the Harvest: A Citizen’s Guide to Community Supported Agriculture*. Revised and Expanded Edition (White River Junction, VT: Chelsea Green Publishing, 2007).）

大山利男解題・翻訳『アメリカの CSA：地域が支える農業』（のびゆく農業 944, 農政調査委員会，2003）.

マイケル・ポーラン（ラッセル秀子訳）『雑食動物のジレンマ：ある 4 つの食事の自然史』（上・下巻）（東洋経済，2009）.（原題：Michael Pollan, *Omnivore’s Dilemma: A Natural History of Four Meals* (New York, NY: Penguin Press, 2006).）

エリック・シュローサー『ファストフードが世界を食いつくす』（草思社，2001）（原題：Eric Schlosser, *Fast Food Nation: the Dark Side of the All-American Meal* (Boston, MA: Houghton Mifflin, 2000).）

斎藤　潔『アメリカ農業を読む』（農林統計出版，2009）.

佐藤亮子『地域の味がまちをつくる－米国ファーマーズマーケットの挑戦』（岩波書店，2006）.

矢ケ﨑典隆『食と農のアメリカ地誌』（東京学芸大学出版会，2010）.

矢ケ﨑典隆・斎藤　功・菅野峰明編『アメリカ大平原－食糧基地の形成と持続性』増補版，（古今書院，2006）.